

潮来市の誇れる文化

第132回

水郷の渡し船

水郷潮来地域は、かつては水路が縦横に張り巡らされており、水路が道路の代わりであり、何をするにも「ろ舟（サツパ舟）」を使っていた。隣の家に行くのも舟、また牛を乗せ田仕事に行くのも舟だった。舟は農作業はもとより生活するには欠かせない重要な役割を果たした。

その後、架橋や乗り物の発達によって、かつての船による交通手段が消え、渡し船の存在も消えていった。かつての渡し船の様子は次のようであった。

◇十三枚の渡し 常陸利根川、西丁と扇島（十三枚）、乗客は学生、職人、買い物客等が利用した。西丁発着所は現在の潮来郵便局付近の水門、扇島発着所は高安接骨院下あたりにあった。

◇加藤洲渡し 常陸利根川、浜町と加藤洲、乗客は学生、職人、買い物客が利用した。みどり屋商店の前より加藤洲の渡し場新左工門川の水門付近にあった。

◇十番の渡し 常陸利根川、乗客は小中学生、水田耕作、買い物客が利用した。潮来十番と十四番、十番分校や潮来の小学校（高学年）などの通学に利用した。渡船場

は十番小学校の隣にあった。

◇大洲の渡し 前川、辻と大洲の西、辻の方波見家より大洲高橋家の棧橋まで約80mの川中を運ぶ。大洲小学校（分校）が4年生までで、5年生以上は潮来小学校への通学船でもあった。

◇曲松の渡し 前川、延方曲松と大洲、延方地に曲松バス停があって、それと接続を果たす役割もした。対岸、村田家の付近に小さな棧橋があった。

◇福島島の渡し 前川、延方西区と福島、福島地区よりの高学年（高等科）・延方中学校（現潮来二中）の通学路でもあった。

◇大船津の渡し 北浦、大船津と延方洲崎鹿島神宮の参拝や鹿島農業高等学校への通学に利用した。鹿島からは潮来・佐原商店街などへの買い物として利用された。

◇徳島の渡し 鰐川、徳島と下幡木、徳島中間地点の茂木家付近と対岸は下幡木水神様付近で運営された。

◇牛堀三島の渡し 常陸利根川、牛堀と扇島、昭和五十九年まで利用された。牛堀夜超川河口付近に渡船場があり十六島地区民が多く利用していた。扇島発着所は境島棧橋であった。

潮来市文化財保護審議会委員

石津 藤好



佐原市十二橋から満載して潮来に着いた渡船
加藤洲渡し昭和30年頃



大洲曲松渡船昭和30年頃



牛堀発着所

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第51回

水郷の魚たち ― ハス

初夏の青空をたなびく色鮮やかな鯉のぼり。子供たちの健やかな成長を願う想いが伝わってきて、何だかホッとする光景です。「屋根より高い鯉のぼり」と歌われるように、いまだに水郷の旧家では大きくて立派なものを見かけます。それとは別ですが、霞ヶ浦・北浦は養殖コイの一大産地で、コイが地域の伝統食材としても根付いています。甘辛いタレで煮込んだ「うま煮」などは初心者にも食べやすく、私の研究室の学生たちにも好まれていたようです。

コイの仲間（コイ科魚類）は世界に3千種ほど、日本に70種ほどが記録されており、淡水魚のなかで最も種数が多いグループです。コイ科魚類には霞ヶ浦でよく採集されるフナ類やモロコ類、タナゴ類、ウグイ類、ハクレン類、



なども含まれます。この多様性に富むコイ科魚類のなかで少し変わり者が、今回紹介する「ハス」です。ハス（写真）は全長30cmほどのコイ科魚類で、雄の成魚は繁殖期に体やヒレが赤紫色になります。国内ではもともと琵琶湖・淀川水系と福井県三方湖だけに生息していましたが、琵琶湖産アユの放流用種苗に混じって全国の河川へと分布拡大。霞ヶ浦では1962年に見つかり、1990年代に増加しました。初夏になると霞ヶ浦に流入する河川に遡上し、砂礫底で産卵します。変わっているのは、国内のコイ科魚類で唯一、魚を主食とすることです。口が「への字」に曲がっているのは、くわえた魚を逃がさないための適応との説もあります。そのいかつい顔に反して、肉質は淡白な白身で、琵琶湖では小骨をつまぐ処理しつつ、塩焼きなどで好んで食されています。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション

加納 光樹